



菊池恵楓園入所者自治会  
副会長 **太田 明** さん (72)

**Profile** 熊本県出身。8歳で発症し菊池恵楓園に入所。小・中学生時代は療養所内の分校で、高校は岡山県の療養所内の分校で過ごす。治療を終え、高校卒業後は退所して東京の大学に進学したが、就職3年目で再発。完治した現在は自治会で啓発活動に尽力。

## 全ての差別の連鎖を断ち切る

差別されるのを恐れて別の名前  
で生活する人もいます。志村さ  
んの名は当時の「合志村」から  
取り、太田さんの名は読んでい  
た新聞から自分の性格に合う字  
を選んで付けました。

結婚差別にも直面します。志  
村さんの弟の結婚相手とその家  
族は、医者から「ハンセン病は  
遺伝する。結婚を許してはいけ  
ない」と告げられました。二人  
は反対を押し切り結婚しました  
が、後に妻は病気で他界。再婚  
するも相手の親族から猛反対を  
受け、7カ月で離婚しました。  
その後、弟とは音信不通に。妹  
も結婚まで交わした相手と破談

## 他人事でなく 自分事として考えて



菊池恵楓園入所者自治会  
会長 **志村 康** さん (83)

**Profile** 佐賀県出身。14歳でハンセン病を発症し、  
親元を離れて菊池恵楓園に入所。29歳で完治し、32  
歳で社会復帰。30年近く養鶏所を営み、後遺症治療  
のため60歳で再入所。現在は講演などの啓発活動や  
人権回復運動に取り組む。

菊池恵楓園には入所者でつ  
くる自治会があり、ハンセン  
病問題の啓発活動や人権回復  
運動に取り組んでいます。自  
治会の志村康会長と太田明副  
会長に、自身の経験と活動へ  
の思いを伺いました。

### 奪われた日常

中学2年生の夏。グラウン  
ドで草取りをしている志村さ  
んの頬が赤くなっていること  
に担任教師が気付きました。  
「九州大学で診察を受け、ハン  
セン病と分かりました。診断  
結果を聞いた瞬間、頭の中が  
真っ白になりました。シヨッ

クでした。髪の毛一本一本  
から体中の血が引いていくよ  
うな衝撃を受けました」

太田さんは8歳のときに発  
症。最初に発症した母は、太田  
さんが4歳のときに家族から離  
縁されました。「私もいずれ発  
病するのではと心配していた父  
は、私に症状が現れるとすぐに  
療養所に入所させました」

済々黌高校に行き、将来は東  
京六大学で野球をしたいと思っ  
ていた太田さん。約80人の児童・  
生徒が通う療養所内の分校で、  
治療を受けながら小・中学生時  
代を過ごしました。「中学卒業  
までの7年間、家に帰ったこと  
は一度もありません。家族は面  
会に来てくれますが、入所期間  
が延びるほど家族との縁が薄ら  
いでいきました」

発症から入所までの経緯は一  
人一人違いますが、全員が発症  
をきっかけに日常や夢を奪われ  
ていきました。

### 治療は痛みとの闘い

専用の薬による治療は、針で  
刺されるような強い痛みとの闘  
いでした。「40度の熱が出て、  
トイレにもはって行きました。

しています。「私の家だけでな  
く、元患者の多くは同じような  
経験をしてきました。らい予防  
法が廃止され、裁判に勝っても  
家族関係は壊れたまま。差別は  
根強く残り、苦しみは何も変わ  
りませんでした」

### 希薄な当事者意識

平成15年の黒川温泉宿泊拒否  
事件でも、偏見や差別が社会的  
に根強く残っていることが露呈  
しました。

「ホテル側は宿泊拒否という  
差別行為を棚上げ『国や県の  
啓発不足のせい。自分たちも被  
害者だ』と主張したんです。私  
たちはいつの間にか加害者の立  
場にすり替わり、自治会宛てに  
たくさんの誹謗中傷の手紙や  
ファクスなどが届くようになり  
ました。こうした問題が起こっ  
たのは、ホテル側や手紙を送っ  
た人たちに、ハンセン病に対す  
る正しい認識と差別をしている  
という当事者意識が足りなかつ  
たからです」と二人は訴えます。

### 同じ命が生きる社会

ハンセン病の啓発活動や地域  
との交流に取り組む志村さんと

ものすごい脱力感でした」と  
志村さんは振り返ります。

治療の影響により一晩で体の  
部位を変形させてしまうことも  
あり、まひや熱こぶ、神経痛な  
どの後遺症を引き起こしました。  
痛みに耐えかねて首をつったり、  
入水自殺したりする人の姿を何  
度も見てきたと言います。

### 社会復帰は差別との闘い

「ハンセン病は治療法が確立  
し、治る病気です。でも、差別  
がなくならない限り社会的に完  
治することはありません」と志  
村さんは唇をかみます。治療が  
終わっても体の変形などから元  
患者だと分かり、差別されてき  
ました。

昭和28年の龍田寮事件（黒髪  
小学校通学拒否事件）では、患  
者の子どもが差別され、教育の  
機会と龍田寮に住む権利を奪わ  
れました。引き取られた養護施  
設でも身元が分かると追い出さ  
れ、親戚の家をたらい回し。学  
校に行けず、病気ではないのに  
仕方なく療養所に入る子どもた  
ちもいました。

元患者は社会復帰しても身元  
を明かせませんでした。家族が  
太田さん。その思いを次のよう  
に語ります。「ハンセン病問題  
は、隔離された人たちだけでな  
く、隔離した国や国民も当事者。  
両者が人権の回復を図る必要が  
あります。いずれは療養所と地  
域の垣根を取り払い、共に生き  
る社会にしていきたい。そのた  
めにも差別の歴史を学んで入所  
者の声を聴き、理解を深め、共  
感してほしいです」

ハンセン病問題の解決だけに  
取り組んでいるわけではないと  
二人は続けます。「人が人を差  
別する行為がなくならない以  
上、世の中の差別はなくなりま  
せん。全ての差別の連鎖を断ち  
切る。それが私たちの究極  
の願いです」

現在、入所者の平均年齢は83  
歳。90歳以上が68人、最高齢は  
105歳と高齢化が進み、活動  
も年々大変になってきていま  
す。「他者も自分と同じ人権を  
持っていると考えていけば、差  
別は起こらないはず。そのこと  
を伝えるために私は一生懸命活  
動している」と志村さん。「い  
つまで続けられるか分からんけ  
ど」と苦笑いしながらも、二人  
は前を見据えています。

黒川温泉宿泊拒否事件



阿蘇黒川温泉に宿泊する18人が入所者だと分かると、ホテルは宿泊を拒否し全国的に報道された。営業停止処分が決定しホテルは廃業。日本各地から励みだけでなく差別の手紙、ファクスなどが計315通届いた。

龍田寮事件



親の入所で身寄りなくなった龍田寮の児童の通学を、保護者らが一年以上拒否。校門に貼り紙を掲示して龍田寮児童の通学を阻んだり、龍田寮廃止へ向けて集会を開いたりした。

旧監禁室



脱走者や規則違反者が収容された旧監禁室。解放を待ちわびて書かれた日付や落書きなどが生々しく残る。延べ318人が収容。



患者夫婦がわが子のようにかわいがっていた人形。患者には出産が許されず、人工妊娠中絶や不妊手術が行われた。

隔離門



園の外に唯一通じる隔離門では、職員が白い予防衣やマスク、長靴、帽子で全身を包み、通過する患者を厳重に消毒していた。

